

19世紀前半のフランスにおける 女性観と女子の知育擁護の言説

小 山 美沙子

はじめに

本稿筆者は、フランスで出版された19世紀前半の女性のための知識の普及書の研究を進める過程で、前世紀との連続性に注目し、拙著『フランスで出版された女性のための知的啓蒙書（1650～1800年）に関する一研究』（溪水社、2010年）の最終章で、サロンの復活や出版物の再版現象、新たな類似本の出版に見られる前世紀の継承に言及した。しかし、拙論「フランスの19世紀前半における女性のための知的啓蒙書に関する研究」への序章」（本学『紀要』第20号、2000年）で概観したように、教育制度史の観点から見た19世紀前半の女子の知育の貧困ぶりは明白である。女性用の知的啓蒙書が研究テーマとしてこれまで扱われてこなかった所以である。筆者は、19世紀前半の女性読者用のこうした書物の分析を進めるにあたり、女性観や女子の知育を論じる当時の言説の中にこうした書物が出版された背景の探究を試みることを考えた。主な女性論や女子教育論と共に、これまで研究者によってあまり（又は全く）顧みられることのなかった女性擁護論や女子教育論にも光を当てることで、前世紀を継承する女性論と女性の知育擁護の言説を浮き彫りにしていきたいと考えている。しかし、頁数の制約もあるので、具体的な女子教育論については次の機会に譲り、ここでは、当時の女性論や女性擁護論を通して、前世紀にもあった女性の役割への期待や、女性の能力の認識に加え、女性の時代を継承する知育擁護の言説を探ることにする。

1. 女性性と女性固有の役割への固執

19世紀ほど、女性性や母性が強調された時代はない。尤も、これらは前世紀、とりわけRousseau (1712-1778) が啓蒙思想家のひとりとして⁽¹⁾、そしてRoussel (1744-1802)が医者で生理学者の立場から、理論立て、お墨付きを与えた理念が、継承され、より堅固に固定され、流布していったものである。

Emile (1762) の冒頭で、「優しく先見の明のある母親⁽²⁾」に呼びかけるRousseauは、天与の母性を称揚し、子供の最初教育者としての母親の重要性を強調した理論家であった。彼は、解剖学的な男女の相違から、精神的な相違が生じるとし、その筆頭に、男性の能動性と強さ、女性の受動性と弱さを挙げていた⁽³⁾。しかし、それがそのまま女性の絶対的な劣性を意味するわけではなく、「*Toutes les facultés communes aux deux sexes ne leur sont pas également partagées; mais prises en tout, elles se compensent. La femme vaut mieux comme femme et moins comme homme*⁽⁴⁾」と言っているように、性に応じた能力の補完性を主張しているのである。勿論、これは女性固有の役割とこれに呼応する教育を説く論拠となるものである。こうして、Rousseauは、「*toute l'éducation des femmes doit être relative aux hommes. Leur plaire, leur être utiles, se faire aimer et honorer d'eux, les élever jeunes, les soigner grands, les conseiller, les consoler, leur rendre la vie agréable et douce: voilà les devoirs des femmes dans tous les temps, et ce qu'on doit leur apprendre dès leur enfance*⁽⁵⁾」と、19世紀の良妻賢母像を素描して見せたことになる。

その後を受けて、Rousselは、成功を博した女性生理学の書*Le Système physique et moral des femmes* (1775)において、母親となるべく運命づけられた女性の身体を専門家の立場から概説したばかりでなく、男女の体の本質的性的差異を知的・心的差異に結びつけた。「*Si la force est essentielle à l'homme, il semble qu'une certaine foiblesse concoure[sic] à la perfection de la femme. Cela est encore plus vrai au moral qu'au physique*⁽⁶⁾」とし、女性の諸器官に特長的な「あのか弱さ」ゆえに女性には、「抽象的な学問の学習に必要

なあの精神統一の努力⁽⁷⁾」ができないとさえ言っていた。一方で、「あのか弱さ」ゆえに、「女性の主たる性格である優しく愛情深い感情が生じる」のであり、又、自身の無力感が「社会の美德の基礎である生来の慈悲心⁽⁸⁾」につながるとしており、19世紀の理想的な婦人像である、家庭の天使、慈善家としての天分が示唆されているのである。尤も、か弱さゆえに感じ易い⁽⁹⁾女性は、感受性に優れ、従って、「«cette finesse de tact et cette pénétration qui consistent à saisir dans les objets qui la[la femme] frappent rapidement, une infinité de nuances, de choses, de détail, et de rapports déliés qui échappent à l'homme le plus éclairé⁽¹⁰⁾»を持ち合わせていると述べ、女性の鋭敏な直感力をも保証したのであった。彼らの書は、19世紀の読者からも歓迎を受け、幾度も版を重ねることになる⁽¹¹⁾。

さて、Rousselを継承し、解剖学上の女性固有の特長から、女性性を露骨なまでに強調したのが、19世紀のフランスで最も有名な医者の一りで、生理学者でもあったJ.-J. Virey (1776-1848)である。彼の医学的見地に由来する女性観は、19世紀、支配的になっていく⁽¹²⁾。

Vireyは、女性生理学と女性論の書*De la femme sous ses rapports physique, moral et littéraire* (1823)において、肉体と精神の緊密な関係を前提に、女性存在全体を、生殖のための子宮、か弱い肉体の諸器官、優美な外形から意味づけようとした。彼は、「«Source féconde et sacrée de la vie, la mère est la créature la plus respectable; [...] c'est Eve ou l'être vivifiant, qui nous réchauffe dans son sein, qui nous allaite de ses mamelles, nous recueille entre ses bras, et protège notre enfance dans le giron de son inépuisable tendresse⁽¹³⁾»と、子を産み、母性愛で幼子を育む母親としての女性を賛美しているが、女性の体の構造から、女性を何よりもまず、母性に捧げられた存在としてクローズアップしたのであった。しかも、とりわけ、か弱く感じやすい体の組織を持つ女性にあっては、知的作業は生殖機能と相入れず、女性にとって「学習は、妊娠、授乳、月経時には有害」でさえある⁽¹⁴⁾。男性とは反対に、女性性は、受動的で、理性よりも感情に身をまかせ、論理や分析よりも直感に

優れ、「知的機能に役立つ器官よりも情動機能に役立つ器官の方が発達している」と考える Virey にとって⁽¹⁵⁾、豊かな知性と女性性は両立しえないものであった。母性のために造られた体と、精神的活力や高度な才能を要求される公的な活動には不向きな性向は、女性の活動の場を家庭に限定するための有力な論拠となるものであった。

尤も、Virey は、女性が科学や文学、芸術で創造的な天才の域に達することができないとしても、「自然が女性に割り当てた輝かしい取り分」として、優美さ、繊細さ、直感力、優れた会話の才能を備え、女性は「人が気に入るものの生来の判定者」であり、「社会を洗練させ、荒々しい我々の習慣を和らげ、言葉に遊びと言い回しを与える⁽¹⁶⁾」などと、前世紀のサロンに集う女性達を想起させるような長所をも幾らか枚挙している。これは、まだそう遠くはない過去の記憶とサロンが復活した当時の時代状況を反映したものであろう。しかし、「soyez toujours ce que la nature vous a formées [...] N'usurpez jamais sur nous l'empire pour l'obtenir toujours; votre puissance est toute dans votre faiblesse⁽¹⁷⁾」と言う彼は、生来の女性的美德を備えた女性は尊重されるべきだと考える一方で、女性が社会で支配的な立場を獲得して、文学・芸術において主導権まで持つことには否定的で、天与の女性性の持つ美質で風俗や文学・芸術に貢献することを理想としているのであった。従って、彼が、「La femme, créée par la nature l'arbitre de tout ce qui plaît, influe par la conversation sur le goût général; elle y transporte son génie, ses vues, son caractère⁽¹⁸⁾」と女性の影響力を許容する時は、あくまでもその性の属性の範囲内においてであった。

一方、詩人で劇作家の L'oucouvé (1764-1812) は、天与の女性の役割を韻文詩 *Le Mérite des femmes* (1801) で称揚し、読者の感性に強く訴えた。この詩編は、初版の年に第6版を世に出すほど好評で、19世紀末に至るまで版を重ね続けることになる⁽¹⁹⁾。

作者による序文に、「j'ai cru pouvoir les[les femmes] défendre en peignant leurs qualités générales. Je les présente comme belles, comme mères, comme

amantes ou épouses, comme amies, comme consolatrices⁽²⁰⁾」とあるように、男性のための永遠のステレオタイプであるこうした女性像が、この詩の中で謳われ、擁護されている。確かに、剣で戦った女性の偉人の例も末尾に挙げられてはいるが⁽²¹⁾、少なくとも、長い懐胎期と産みの苦しみを経て出産し、「乳母」、「導き手」、「先生」、慰め役として幼年期の子供を育てる献身的な理想の母親像の描写ほど力が注がれていないことだけは確かである⁽²²⁾。

ところで、上層階級の女性達に、伝統的な家庭での役割にとらわれない活発な活動を可能にしていた18世紀は、Louis XIV時代の強権主義が後退し、自由な雰囲気の流れの漂う時代であると共に、退廃的な世相と風俗の時代でもあった。これに加えて、世紀末の革命が社会を益々混乱と混沌に落としめたのであった。こうした状況で、まず、秩序と安定が求められ、同時にブルジョワ主導の効率的な産業育成と社会運営のために、社会の基盤としての家庭が重視され、男女の役割分担を正当化する言説が歓呼で迎え入れられたとしても不思議はない。既に革命前、パリ高等法院の弁護士であったBoudier de Villemert (1716-1801) は、女性への助言の書*Le Nouvel ami des femmes* (1779) で、「貴女方は母親であり主婦であるか、あるいはそうなるよう運命づけられている。家庭こそは、貴女方の帝国である。貴女方の主たる幸福は、家庭で良き秩序と調和を維持することなのだ。つまり、かくも多くの女性達が家庭の外に空しくも求めに行く幸福を、貴女方は家庭の中に定着させるべきなのだ⁽²³⁾」と訴えていた。又、Vireyも、先の書で18世紀の退廃的な世相の状況を振り返り、「かくも放埒な社会において、女性達は妻、母としての最も神聖な義務を怠った⁽²⁴⁾」と批判していた。一方、弁護士のM.-S. Raiter (生没年不詳) は、*De la condition et de l'influence des femmes, sous l'Empire, et depuis la Restauration* (1822)⁽²⁵⁾ で、現代では、女性の影響力は彼女達が社交界に君臨していた前世紀程輝かしくはないが、「いかなる社会体制であれ、我々は女性達から妻、母という肩書きを奪うことは決してないだろうから、従って、彼女達は家庭の運営権を部分的に保

持し続けるであろう」とし、女性達が「社会全体になおも強力な影響を与える」のは、この家庭からであると主張した。そしてその国家的な規模での重要性を指摘して、「*Quelqu'un a dit que du bon ordre établi dans les familles, dépendent l'ordre et la prospérité des empires, et que l'état le mieux réglé est celui où chaque citoyen sait le mieux régler sa maison*」と述べるのである⁽²⁶⁾。

のみならず、革命の混乱による荒々しく粗野な風俗への嫌悪が、これと対極にある前世紀の上流社交界の女性的な優美さへの郷愁をも掻き立てないではおかなかった。その意味では、1801年にLougouvéが発表した詩編は、女性擁護だけを意図したものでなく、革命後の政情不安の中、残存する革命時代の風俗を女性によって矯正しようとするものでもあった。事実、彼はこの詩編の序文で、「*Lorsque j'ai composé ce poème, je n'ai pas seulement eu dessein de rendre justice aux femmes; j'ai encore voulu, en retraçant leurs avantages, ramener dans leur société un peuple valeureux que les secousses de la révolution ont accoutmé à s'en éloigner, et, par ce moyen, le rappeler à sa première urbanité, qu'il a perdue dans la lutte des partis*⁽²⁷⁾」と言っている。そして、「女性達は、物腰を洗練させ、良き作法を与えるのであり、彼女達は、良い流儀と良い趣味の真の教師であり、彼女達は、我々の際だった特徴であった優美さと感じの良さを我々に取り戻させ、かくも多くの混乱と大罪と不幸がその本来の気質の外に投げ出したとも言えるこの国民を作り直すことができるであろう⁽²⁸⁾」と、女性がその固有の美質を発揮することに大いに期待を寄せるのである。

2. 中庸を得た女性像

秩序と安定への志向は、女性性と女性の伝統的な役割への固執を促し、中庸を得た女性像が歓迎されることになる。従って、革命の混乱の行き過ぎへの嫌悪と、その反動から革命前の時代への郷愁が掻き立てられたとしても、前世紀の女性の時代も又行き過ぎと映ったのであった。vicomte de SÉGUR (1756-1805)の*Les Femmes, leur condition et leur influence dans l'ordre*

social chez les différents peuples anciens et modernes (3 vol., 1803) は、19世紀前半度々版を重ねた女性論の書で、女性史の部分は、時代の進展と共に別な著者によって第4巻が追加され、これまでの調べでは、初版から1836年まで、少なくとも計13の版(内容が同じで判型や年代の異なる書も含む。)が出た⁽²⁹⁾。その1820年版の第4巻で、作家の Charles NODIER (1780-1844) は、女性達は公の場で権勢を振るい過ぎていたから、「革命で少々[女性に対する] 礼節の精神が壊れたのも多分悪くはなかった」とさえ言い、「彼女達の極度の影響力」は国家にとって危険であると主張した。彼は、「Je voudrais que l'empire des femmes fût uniquement privé」と、女性の影響力はあくまでも家庭内に留まるべきであると考えていた⁽³⁰⁾。世紀初頭に活躍した Staël 夫人を讃える時も、彼は「Bonne mère, épouse chérie, amie sincère, auteur célèbre, la place de madame de Staël est marquée dans la postérité⁽³¹⁾」と、バランスの取れた女性像を示して見せるのである。

一方、Ségur は、「女性達の欠点は、一般に教育、法、慣習の悪徳の結果である」と結論づけている著者の友人なる人物の手紙を本書で紹介すると共に、本書の結びで、「女性の知性と心を育むこと」が女性の教育の「唯一の目的」であるべきだとし、女性の教育を重視している。しかし、同じ結びで、「Je sais qu'on doit également éviter de donner trop, ou trop peu d'instruction aux Femmes; je sais que le penchant habituel qui les porte à dominer, doit les exposer à quelques formes de pédanterie, si elles sont savantes; mais l'ignorance est pour elles le danger le plus véritable」と、特に無知を危険視しているものの、結果的には博学過ぎず、無知でもない、中庸を得た女性の知育を理想としているのである⁽³²⁾。尤も、女子の知育における中庸性は、前世紀にも支持されてきた考えではある。

3. *Les Femmes...* に見る二重性

Ségur は、先の *Les Femmes...* で、本書の目的のひとつに、まず、「男女は異なるが、平等であり、男女が一切において補完的であり、一方が他方に

ない美質を持っていたとしても、他方は、自身に固有の同じ位尊い長所を持っていることが認められる」ことを証明することを挙げたり、「自然の掟に従おう。女性達は、母性愛と恋のために生きねばならない⁽³³⁾」などとしている。本書が、男女の補完性と女性性信仰に貫かれた Rousseau の女性観を継承する女性論であることは確かである。又、本書の目的のひとつには、「発明の才能を別にして、女性の知的美質は男性と同等であること⁽³⁴⁾」を証明することが挙げられており、男女の知的平等も制限付きであり、先に示したように、女性の知育への期待も月並であった。

しかしながら、女性達が、学芸の分野で精彩を放ち、社交界に君臨したなどといった事実も記してきた Ségur は、結論において、「Je crois avoir prouvé par quelques faits, par des rapprochements assez frappants, que, sous tous les rapports, les Femmes ne nous sont pas inférieures⁽³⁵⁾」と、男女における本質的な優劣の区別が存在しない事実を確認したとも受け取れる発言をしている。又、女性への過去の極端な称賛と非難を超えて「真実に回帰した後で」、「peut-être arriverons-nous à l'époque où l'égalité des deux sexes sera rétablie, où l'on cessera de juger les Femmes ensemble, mais individuellement⁽³⁶⁾」とも言っており、Poulain de La Barre の有名な女性擁護論のタイトルを交えながら、ステレオタイプ化された女性像を脱する可能性をも示唆しているのである。

Raiter による第4巻(1822年)も、女性性への信仰が感じられる書で、「その思考の変わり易さ」のせいで、女性は粘り強くひとつの考えに執着できないとしているが⁽³⁷⁾、一方で、これまでに、文学、絵画、数学、物理などで秀でた女性達の存在を指摘している。とりわけ、Staël 夫人については、「une profondeur et une étendue d'esprit qui la[Madame de Staël] rapproche de nos plus grands écrivains」を示したと絶賛し、「Cette femme extraordinaire semblait destinée à prouver qu'il n'est rien que son sexe ne soit capable d'entreprendre, lorsqu'une éducation solide a développé toutes ses facultés⁽³⁸⁾」と述べた後、数学の分野で名声を得た Sophie GERMAIN (v. 1776-1831) や marquise du

CHÂTELET (1706-1749) などの例を挙げている。女性の知的能力は、分野を問わず「しっかりした教育」によって育むことが可能であることを示したのであった。

更に、1836年版(確認されている限りでは最終版)の第4巻は、H. Raisson と E. C. Piton (いずれも生没年不明) によるもので、Raisson による序文は、男女の本性的な性質の差異から、男女の役割の違いを正当化し、女性の伝統的な家庭での役割を重視している。その一方で、優美さ、繊細さ、直感力を伴う魅力的な会話の才ゆえに、女性は、「人に気に入られるものの判定者」であり、「社会を洗練し」、「野蛮な風俗を文明化し」、「言語活動に戯れと上品な調子を与える⁽³⁹⁾」などと、Virey や Lougouvé 同様、女性的美質を念頭に置いたものではあるが、サロンの伝統に見られる女性の役割をも重要視したのであった。又、女性にしっかりした教育を与えることの意義を、「Avec une éducation forte, élevée, les femmes seraient exposées à moins de fautes et d'erreurs, le charme naturel de leur esprit prendrait plus de solidité sans rien perdre de son brillant, et les rapports sociaux en deviendraient plus sûrs et plus agréables⁽⁴⁰⁾」と記しており、前世紀の女子の知育擁護に見られた論拠が示されていることも指摘しておきたい。現行の女子教育について、Raisson は、「慣習や古い因習、馬鹿どもや無知な者達の力」が女性の教育の改善を阻んでおり、女性の無知に胡坐をかいている「劣った男達」が、「女性達の教育の敵」であると厳しく批判している。勿論、不十分な女子教育そのものにも批判が向けられていた。「若い娘達の現行の教育制度では、女性に生まれた天才は皆、公衆にとって失われてしまっている」と嘆くのである。更に、妻としての役割を重視する立場から、現行の教育による「最も完璧な女性」というものも、必要な時に夫の助けにならないと不満を述べることも忘れなかった。「Quel excellent conseiller un homme ne trouverait-il pas dans sa femme, cependant, si elle savait penser!」と、彼が言うのも、娘達が将来夫の助言者としての務めを立派に果たすためには、その知的能力を養成する必要があると考えているからに他ならない⁽⁴¹⁾。

以上に例示したように、*Les Femmes...* には、Rousseau 流の女性性やその伝統的な女性の役割への固執が色濃く見られる反面、時にその全体的な論旨の枠を逸脱した、時に前世紀の記憶を蘇らせるような女性擁護の言説が混在しているのがわかる。女性の時代の強烈な残像が、著者達を突き動かさないではおかなかったのであろうか。

4. 女性の時代を継承する女性論と女性の知育擁護

ところで、Ségur の *Les Femmes...* には、これまで挙げた補巻の他に «M^{me} de S' El ***» なる女性による 1828 年版がもうひとつあった⁽⁴²⁾。そこに収められている «Réflexion sur les femmes générales»こそは、18世紀の女性の時代と19世紀の橋渡し的存在である comtesse de Genlis (1746-1830) による *De l'influence des femmes sur la littérature française, comme protectrices des lettres et comme auteurs; ou Précis de l'histoire des femmes françaises les plus célèbres* (1811) の前文に当たる «Réflexion préliminaire sur les femmes»である。本書は、前文と共に1813年英仏で出た作品集の中に収められ、1826年にフランスで単行本で再版された。仏文学に影響を及ぼした女性の作家や文芸の庇護者達の歴史の概説書である本書の前文は、女性と女性作家を力強く擁護するものである。

comtesse de Genlis は、全体的に見て男性作家の女性作家に対する優越性は事実だが、それは、女性の資質が男性より劣るからではなく、学習の欠如と教育に原因があると考えていた。従って、その優れた資質を文学上のキャリアではなく、現実世界での行動で発揮することになったとして、«Le manque d'études et l'éducation ayant dans tous les temps écarté les femmes de la carrière littéraire, elles ont montré leur grandeur d'âme, non en retraçant dans leurs écrits des faits historiques, ou en présentant d'ingénieuses fictions, mais par des actions réelles⁽⁴³⁾»と弁護している。

尤も、そうしたキャリアを試みる女性達もいた。彼女達は、男性に比べて遥かに少数であるにも拘わらず、悲劇や小説、詩において優れた才能を

発揮し、しばしば男性を凌駕しさえしたとして、Genlisは女性の能力を擁護している⁽⁴⁴⁾。「La faculté de sentir et d'admirer ce qui est grand, ce qui est beau, et la puissance d'aimer, sont les mêmes dans les deux sexes: ainsi l'égalité morale est parfaite entr'eux⁽⁴⁵⁾」とする彼女は、作家に必要な精神的能力の性差を認めなかった。

ところで、天与の知的能力を伸ばすのは神意であり、自然の掟に従うことである。確かに、女性達は、一般に統治や政治をするためには造られていない。しかし、彼女達の中にある「supériorité de l'esprit」は、妻、母として有益に使うことができるだけでなく、作家としての能力を開花させることもできるはずなのだ。作家になりたいという女性達の野心を快く思わない社会通念を批判すると共に、「一体どうして彼女達にはものを書いたり作家になることが禁じられているのか?」と言うGenlisは、女性に真の適性があればそれを育むべきだと訴えた⁽⁴⁶⁾。実際、彼女は、未来の女性作家のために必要な助言を展開していくのである。又、「見解の鋭さ」と「文体の優美さと軽妙さ」を持ち合わせている女性達は、勉学と教育によって「d'excellens critiques des ouvrages d'imagination」にもなれるとし⁽⁴⁷⁾、批評というジャンルに必要な規範についても説明を施していく。教育家で自身も作家として活躍したGenlisは、本気で女性の文学的才能を開花させようとしているのである。

一方、女性の全般的な知的能力と知育を擁護し、Poulain de La Barreの伝統を復活させた者もいた。文筆家のCharles MALO (1790-?)⁽⁴⁸⁾とCésar GARDETON (生没年不詳)⁽⁴⁹⁾が、その顕著な例である。

Maloの女性擁護の書、*Le Mérite des femmes* (1815) は、Legouvéの詩編と同じタイトルを採用している。しかし、Legouvéの書とは大きく異なり、Maloは知的側面においても女性を強く擁護したのであった⁽⁵⁰⁾。序に続く「Des Femmes」の章では、男性は、女性を対等と見ておらず、いつの時代でも男性の「耐え難い虚栄心」が女性を「下劣な隷属状態」に置き、女性から「あらゆる教育を遠ざけ」、「la culture de notre esprit est ce dont vous vous

souciez le moins⁽⁵¹⁾」であるとし、こうした不当な現実に対して女性の立場に成り代わって反駁する言説が展開されているのである。女性達が、歴史上、戦闘、国の統治、詩や学問など、あらゆる分野に参与し活躍した例も少なくない事実は、女性達の素養を証拠立てるものである。従って、例えば、女性達が「少しでも、貴方[男性]達の最も深みのある知識を習得する苦勞」をすれば、デッサンや刺繍など女性の領域だと男性達が見なしている分野と「同じ位その素養があるだろうに」と述べ、更に、「貴方達は、いかなる権利で我々に学問と芸術の勉強を禁じるのか？」と女性の知的育成を擁護する立場を明確に示している⁽⁵²⁾。

更に、「Science-Poésie」の章で、Maloは、「自身の権利に執着する」我々男性が、「婦人達を、無慈悲にも何らかのあらゆる勉強から遠ざけねばならない」のは、「il ne nous est que trop prouvé que les femmes y[à toute étude quelconque] seraient aussi propres que nous; qu'elles ne prouvent en général rien de trop rebutant, rien de supérieur à leur esprit dans les sciences les plus abstraites; qu'enfin elles ont plus de vivacité, de délicatesse et d'agrément que nous dans leur manière d'étudier et de débiter ce qu'elles savent⁽⁵³⁾」であるからだと述べ、女性が男性同様あらゆる学業に適していることを強調している。事実、いつの時代でも「博学な(savantes)、時に博学であり過ぎさえする女達」がいた。Maloによると、女性の大部分に天与の知性(esprit)があり、それが男性には許し難いことなのだという⁽⁵⁴⁾。彼は、男性には太刀打ちできない書簡体文学での女性の活躍に触れるなど、文学の分野での女性の過去の栄光と«le nombre des femmes spirituelles qui se livrent de nos jours aux douceurs du culte des Muses»が増加するであろうと、慧眼にも、女性作家が多数輩出することになる時代を予言している。のみならず、「aucune science, telle profonde, telle abstraite qu'elle soit, n'a été étrangère aux femmes」であり、女性の「哲学者、医者、神学者、歴史家、法律家」がおり、「世界のあらゆる言語」も女性達には「児戯に過ぎない」し、文筆家達を保護したのも女性達であった。Maloは、嘗ての女性達の学問ブームをも想起させるような事実を、部分的

に具体例を挙げながら読者に喚起していく⁽⁵⁵⁾。こうして彼は、「文学に造詣の深い、博学な、あるいは物語のように情熱的な空想をする女性達」、特に「文芸の熱烈な女性の庇護者達」が過去から未来へと存在し続けることを証明しようとしたのであった⁽⁵⁶⁾。

これに対して Gardeton は、Malo と同様の立場を取りながら、女性の優秀性をもっと徹底した形で論証しようとした。その最初の女性擁護の書は、*Le Triomphe des femmes, ouvrage dans lequel on prouve que le sexe féminin est plus noble et plus parfait que le sexe masculin* (1822) である。巻末には、17世紀から19世紀初頭までの女性賛美や女性擁護の書の一覧«Ouvrages en faveur des dames»が付されており、本書がそうした伝統を踏まえて書かれたものであることは確かである⁽⁵⁷⁾。Gardeton は、序文の冒頭で、「ここで私が主張することは、ある人々、特に、物事を偏見でしか判断せず、万人の規範であるはずの且つその決定が常に確かである理性を蔑ろにする人々には不条理に思えるだろうということを私は疑わない」などと言っている。反偏見と理性の尊重という啓蒙の時代の精神を漂わせて主張の正当性をアピールする著者は、男性によって歪められてきた女性像を断罪すると共に、«l'excellence de la femme»を浮き彫りにし、「男性の野心と不正、横暴が生来の権利として女性に属しているものを奪った」という結論を本書で導こうとしたのであった⁽⁵⁸⁾。

Gardeton は、«les sciences qui sont la perfection de l'esprit, n'ont point de sexe, toutes les ames[sic] raisonnables en sont également capables, et elles ne renferment rien qui soit au-dessus de la portée des femmes [...] puisque les ames [...] ne reconnaissent point de sexe⁽⁵⁹⁾»と、17世紀のPoulain de La Barreや18世紀のRiballierらの主張を繰り返して、男女における学問に取り組む能力の対等性を強調する一方で、身体上の性差が女性の学問への適性をより有利にしているとさえ述べたのであった。例えば、男性より華奢な体質である女性は、それだけ非物質的であり、その分、«lumières de l'esprit»を浸透させ易いから、学問により向いていると言うのである⁽⁶⁰⁾。彼は、自然は、女性を学識から

遠ざけるどころか、男性と共に学識を分かち合うために必要なものを全て女性に与えているのだから、男性には女性に学識を禁じる権利はないとしている。男性がそうした不当な行為に出るのは、男性の支配権への妄執と、女性があらゆる分野に秀でることで、「自身の独裁のくびき」が揺るがされるのではないかという恐れが男性にあるからだと言っている⁽⁶¹⁾。しかし、男性達の邪魔立てにも拘わらず、いつの時代にも、「非常に教養のある多数の女性達⁽⁶²⁾」が存在していた事実を示し、女性が学問をする能力のある有力な証拠であると主張した。この他、「l'esprit, le jugement et la raison n'ont point de sexe; ils sont autant dans les femmes que dans les hommes, et même avec plus de perfection⁽⁶³⁾」と、Poulain de La Barre以上に女性の知的能力の優秀性を強調する彼は、女性は国を統治するのに適しており、男性が女性に国事に関する知識を与えず、あらゆる公職から遠ざけていることを不当だと非難しさえした。

要するに、「男性達の不正義と常軌を逸した支配欲」が、不当にも、女性達の「le droit divin et humain」に勝利しており、女性達から、「横暴な法律」によって「la liberté avec laquelle elles[les femmes] naissent」を奪い、不当な慣習でこれを廃止し、女性に施される「l'éducation molle et oisive」でこれを消し去ったのだと Gardeton は語気を強める⁽⁶⁴⁾。そして、女性が「oisiveté」と「ignorance」の状態のまま、男性への隷属に慣らされて育まれることを問題視するのである⁽⁶⁵⁾。ここには、本書の巻末のリストに挙げられている Olympe de GOUGES (1748-1793) の *Droits des femmes* (1791) や、Mary WOLLSTONECRAFT (1759-1797) の *A Vindication of the Rights of Woman* (1792) の影響が感じられる。

事実、Gardeton は、*Les Droits des femmes, et l'injustice des hommes* (1826) というタイトルの書を、Wollstonecraft の書の「第8版の英語からの自由翻訳」と称して出版している⁽⁶⁶⁾。尤も、これは翻訳書ではなく、女性の隷属の不当性や無能な女性を形成する社会環境を告発した Wollstonecraft の書の影響が見られる *Le Triomphe des femmes* での主張を、大筋で繰り返した

ものである。且つ、Wollstonecraft同様、女性の知育の重要性を強調しているが、彼女の書に比べて、女性の知的能力の擁護に力点が置かれている。Gardetonは、ここでも、男性の女性に対する優越性と女性の従属性が理性的な論拠なしに正当化されてきたことに対して異議を唱え、これがいかに偏見や根拠のない習慣で男性の不当な支配欲の所産であるかということ、先の書よりも一層論理的に証明しようとした。「elle[l'âme] ne peut point avoir de sexe」とか、「l'âme opérant de la même façon dans les deux sexes, est par conséquent capable des mêmes fonctions」と、魂の働きに性差がないことを改めて強調し、男女の魂に「多様性」があるのは、全て「教育、訓練、生活の多様な環境において我々を取り巻く外的対象の影響による」ものであるとした⁽⁶⁷⁾。従って、女性達は、男性同様に勉学に専心する事が可能になれば、「学問やあらゆる有益な知識において、少なくとも、男性達に匹敵する第一歩を踏み出すのは疑いがない⁽⁶⁸⁾」のである。

又、男性は、「勉強や知識」が女性を「傲慢で性悪にする」という奇妙な口実で女性を学問から遠ざけようとするが、「偽りの表面的な知識だけがそうした悪影響を及ぼす」のであり、「le vrai savoir et les connaissances solides ne peuvent rendre les femmes ainsi que les hommes que plus humbles et plus vertueuses」と述べるGardetonは、Poulain de La Barre同様、有徳であるためには、むしろ学識が必要であると考え、勉学や学識によって、悪徳の源である無知を克服することができると主張した⁽⁶⁹⁾。更に、知識の獲得は、「美德と至福」への到達に不可欠であり、「思考の的確さ、言語活動の適切さと行動の正しさ⁽⁷⁰⁾」に導くものであり、様々な公職に就くための要件である。男性達は、あらゆる権力と高位高官を独占したいがために、女性達の知識獲得を阻んできたが、しっかりとした知識の獲得が許されれば、彼女達は国家を統治し、学問を教え、裁判官や弁護士、医師、哲学者や神学者などになることもできる（男性以上に有能になることも可能である。）とし、「il n'y a point de science, point de charge publique dans l'Etat, que les femmes ne soient naturellement aussi prores à bien remplir que les hommes⁽⁷¹⁾」

と断言するのである。ここにも、Poulain de La Barreの主張が継承されていることを指摘しておきたい⁽⁷²⁾。

ところで、Gardetonは、七月王政下、復古王政時代に世に出した書と同じタイトルを用いて再び女性擁護論を出版した。*Le Triomphe des femmes, ou Esquisse des vertus et des talents du beau sexe, entremêlée de réflexions sur les avantages que les jeunes gens peuvent recueillir de la société des demoiselles vertueuses* (1834)がそれである。尤も、これは、先の2つの書のような鋭い論調の女性擁護論ではなく、女性的な美質への趣向が目立っているが、先の書の流れを組むものではある。

Gardetonは、本書でも、間違った男性優位の観念や、女性の力の回復を恐れて、「女性の学問を人に気に入られる事に限定し」、「女性が考えることを、ほとんど犯罪とみなしている」などといった状況を非難し、「elles[les femmes] l'emportent sur les hommes par l'esprit et par le cœur⁽⁷³⁾」と、女性の本来の精神的な優秀性を讃えている。これに加えて、女性達との交流がいかに男性にとって有益で重要であるかが強調されているのである。但し、「De tous les êtres, je n'en vois point dont le commerce puisse mieux former l'homme que celui des femmes; ce sexe réunit les charmes de l'esprit et du corps [...]」と言う時、女性の「魂の偉大さ」や「精神の鋭敏さ」だけでなく、「性格の優しさ」、「感情の繊細さ」、「物腰の優美さ」などといった伝統的に女性的な美質とされてきた部分をも評価している⁽⁷⁴⁾。しかし、「社交界は、趣味、趣向を洗練させる術を、書物で知ったことを使う術を学ぶ学校である。自分が知っていることを、女性達でもって研ぎをかけないのは、何も知らないのと同じである」という言葉は、少なくとも女性が主催した社交界の伝統を想起させるものである⁽⁷⁵⁾。Gardetonは又、女性の知性を証拠立てる事実として、女性達が「魅力的な好奇心」をサークルやプライベートな場で発揮しており、この好奇心が「男性達の上に君臨」することを保証しているのだとしている。すなわち、「彼女達は、男性達の許で、彼らが気づかないうちに教養を積むことで、彼らが彼女達に拒んだ教育の埋め合わせをする

のだ。彼女達は、質問し、微細な細部に立ち入り、我々の美德と欠点を研究する。つまり、何も知らないように見えていても、彼女達はより教養を積もうとしているのだ⁽⁷⁶⁾」と、サロンで活躍する知的な女性達の伝統をも Gardeton は評価している。

以上のように、前世紀の女性の時代を継承するような女性と女子の知育擁護の言説があったことも指摘しておかなければならない。尤も、これらは、Lougouvé の詩編のような成功を博したわけではなかった。

むすび

19 世紀のフランス女性史が、女性を永遠の未成年者扱いするあの Napoléon の *Code civil* (1804 年) で暗い幕開けをしたことは周知の事実である。女子は、教育制度においても男子に遅れを取り、称揚される母性と女性性神話のイデオロギーの中に閉じ込められ、あるいは進んでそれを受け入れ、神話を固定させる共犯者となっていくであろう。勿論、この現象は、前世紀既に識者達のお墨付きも得てその価値を認められていた理屈が時代の要請で主流になったということではない。しかし、女性神話が女性を限定的な知に囲い込むという否定的な見解に繋がる反面、見方を変えれば、実は女性ならではの能力を発揮するための知への接近の口実となりうる可能性もあるのである。又、前世紀にも定番であった節度ある範囲での女子の知育の擁護も、女性に知への接近を許容する論拠となりうるものである。本稿で言及した Genlis や Malo、Gardeton の言説に至っては、「女性の黄金時代」の記憶を蘇らせるものであり、サロン文化全盛の時代においてさえ特異であった女性の知的能力への信頼と女子の知育擁護が改めて表明されるところに、時代の連続性を思わないではいられない。とかく専ら否定的に捉えられがちな当時の女性観や、恐らくは例外的ということで見過ごされてきた可能性のある進歩的な言説も、この時代の女性用の知的啓蒙書の探究を進めてきた本稿筆者にとっては、有力な時代背景のひとつと映るのである。

註

(1) 既にパリ高等法院弁護士のBoudier de Villemert (1716-1801)が、好評を博した女性への助言の書*L'Ami des femmes* (1758)で、母性愛を称揚し、母親による幼児教育の重要性を強調し、「Quelque tendres que soient les sentimens d'un père pour ses enfans, ils trouvent encore dans le sein d'une mere des témoignages d'une plus vive tendresse. [...] il n'est point dans la nature de liens comparables à ceux qui unissent une mere tendre à des enfans qui la payent de retour」、*«La plus noble occupation d'une mere est de former de bonne heure le cœur & l'esprit de ses enfans, elle leur doit les premières instructions: cette première culture décide du sort de ces jeunes plantes; & l'impression qu'on reçoit dans cet âge tendre, ne s'efface jamais»* (*«Chapitre X. Education des enfans»* in *Ibid.*, p. 142, p. 148.)と言っていた。

(2) ROUSSEAU, *Emile ou De l'éducation*, Garnier Frères, 1964, p. 5 参照。

(3) *Ibid.*, p. 446.

(4) *Ibid.*, p. 454.

(5) *Ibid.*, p. 455.

(6) ROUSSEL (Pierre), *Système physique et moral de la femme*, Crapart, 1803, p. 14.

(7) *Ibid.*, p. 23 参照。

(8) *Ibid.*, p. 24 参照。

(9) *Ibid.*, p. 35 参照。

(10) *Ibid.*, p. 22.

(11) 19世紀前半に限っても、Rousselの書は判明しているだけで、5回版を重ね、*Emile*は、フランス国立図書館所蔵のこのタイトルによる単行本(完全版)で、11の版を数える。

(12) *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*の第8巻(1872年)の項目「FEMME」は、女性に関する「解剖学及び生理学」の説明に、Vireyによる記述を採用しており、女性用の百科事典*Dictionnaire de la femme* (1897)の項目「Femme」もこのVireyの記述を踏まえている。

(13) VIREY (Julien-Joseph), *De la femme sous ses rapports physique, moral et littéraire*, 2^e éd., Crochard, 1825, p. 4. 初版(1823年)の出版申告部数は、1,500部であった。

(14) *Ibid.*, p. 171 参照。

(15) *Ibid.*, p. 187, p. 184, p. 173 参照。

(16) *Ibid.*, p. 224 参照。

(17) *«Section cinquième. De la femme considérée sous le rapport littéraire»* in *Ibid.*, pp.

327-328. 尚この節は *De l'influence des femmes sur le goût dans la littérature et les beaux-arts, pendant le XVII^e et le XVIII^e siècles* (1810) をタイトルを変えて本書に収めたものである。

(18) *Ibid.*, p. 292.

(19) Lougouvéの最も人気を博したこの詩編は、本稿筆者が、フランス国立図書館と当時の出版カタログで確認した限りでは、七月王政時代までに初版を含め30位の版が出た。1813年版が1,000部印刷、1824年版が4,000部、1830年版が4,800部の出版申告部数を確認している。

(20) LOUGOUVÉ (Gabriel-Marie-Jean-Baptiste), *Le Mérite des femmes*, L. Janet, 1824, p. 5.

(21) *Ibid.*, pp. 28-29 参照。

(22) *Ibid.*, pp. 17-19 参照。

(23) BOUDIER DE VILLEMERT, *Le Nouvel ami des femmes*, Monory, 1779, pp. 166-167 参照。

(24) VIREY, *Op. cit.*, p. 302 参照。

(25) Ségurの *Les Femmes, leur condition et leur influence dans l'ordre social* (1803) の再版で、Mar.-Stan. Raiterがその第4巻として追加したものである。

(26) RAITER, *De la condition et de l'influence des femmes, sous l'Empire et depuis la Restauration*, Thiériot et Belin, 1822, pp. 239-240 参照。

(27) LOUGOUVÉ, *Op. cit.*, pp. 10-11.

(28) *Ibid.*, pp. 11-12 参照。

(29) 1819年には、3つの版が計3,850部の出版申告がなされた。その後、1820年版が1,500部、1821年版が3,500部の出版申告がなされた。尚、初版は、1819年に3巻本のまま再版され、1819年（出版報と出版申告台帳でのみ確認できた年代で、現物は確認されていない。）もしくは1820年にCharles NODIERによる最初の追加版が出た。尚、Ségurは、1790年に軍務を退いてから、文学に専心し、小説や演劇、詩の創作活動を行なった。同時に社交界人でもあり、「Homme du monde, d'un esprit léger, d'une conversation agréable, d'une aménité charmante, il brillait dans la société par ses bons mots, ses couplets et ses malices sans fiel» (*Nouvelle Biographie générale*, tome 43, 1864, p. 710)であったという。

(30) NODIER, *Les Femmes sous l'Empire, pour faire suite à l'ouvrage de M. le vicomte de Ségur*, Corbet, 1820, pp. 259-260 参照。

(31) *Ibid.*, p. 250.

(32) SÉGUR (J.-A., vicomte de), *Les Femmes, leur condition et leur influence dans l'ordre social chez les différents peuples anciens et modernes*, tome 3, Treuttel et Würtz, 1803, p. 164, p. 314, p. 315 参照。

又、先の Raïter の書は、Ségur の書の 1822 年版に追加の第 4 巻目だが、この中で、彼は Napoléon による民法典を容認する立場から「社会の幸福と良き秩序」の観点で女性の奴隷状態に反対すると同時に、女性に「法律上のより広い権利」を与えることにも懐疑的であった。女性は、極端な隷属状態と過度な自由の「中間の状態」にあるべきだとした。(RAITER, *Op. cit.*, p. 128 参照。)

(33) SÉGUR, *Op. cit.*, tome 1, p.11, tome 2, p. 39 参照。

(34) *Ibid.*, tome 1, p. 12 参照。

(35) *Ibid.*, tome 3, p. 313.

(36) *Ibid.*, tome 3, p. 330.

(37) RAITER, *Op. cit.*, pp. 1-2 参照。

(38) *Ibid.*, p. 140.

(39) RAISSON, PITON, *Les Femmes, leur condition et leur influence dans l'ordre social par le vicomte J.-A. Ségur continuée jusqu'en 1836*, Baudouin, p. 5 参照。尚、全体の結論は Ségur の書によるものである。Raisson らによる追加版は、1834 年に最初に出たが、フランス国立図書館には第 4 巻がないため、詳細は不明である。同年、恐らく、これの再版と思われるものも出ているが、これに若干追加がなされて 1836 年版が出た。

(40) *Ibid.*, p. 8.

(41) *Ibid.*, pp. 8-9 参照。

(42) M^{me} de S^t El ***, *Les Femmes au XIX^e siècle*, Philippe, 1828.

(43) GENLIS, «Réflexion préliminaire sur les femmes» in *Histoire des femmes célèbres*, tome 1, Colburn, Paris et Londres, pp. 9-10.

(44) *Ibid.*, pp. 10-15 参照。

(45) *Ibid.*, p. 13.

(46) *Ibid.*, pp. 28-31 参照。

(47) *Ibid.*, p. 34 参照。

(48) Malo は、演劇作品、詩、歴史書など著書を多数発表すると共に、定期刊行物 *La France littéraire* (36 vol., 1832-1849) を創刊し、「un Cercle des sociétés littéraires」を創立するなど文学の分野で目立つ活躍をしている。又、「Membre d'un grand nombre des sociétés savantes et agent de la Société pour l'Instruction élémentaire」

(*Nouvelle Biographie générale*, tome 33, Firmin-Didot, 1860, p. 90)でもあった彼は教育問題に関心のある識者であった。彼による、子供に読み聞かせる道徳的な読み物 *Leçons d'une mère* (1844) は第2帝政に至るまで版を重ねた。又、彼の編集による *Hommage aux dames* [1834] (定期刊行物と思われるが詳細は不明。出版年代はフランス国立図書館による。) は、女性の文学での才能を讃え M^{me} de Girardin を始めとする同時代の多くの女性達の作品を収めている。

(49) Gardeton は、本稿で問題にする女性擁護論などの他に王政復古時代から七月王政時代にかけて出た家政や、健康に関する実用書、フランス革命史、風俗史、音楽に関する著書がいくつもフランス国立図書館に所蔵されている。

(50) Malo の書では、「Beauté」、「Amour conjugal」、「Vertu」、「Amour Maternel et Filial」、「Fidélité」、「Héroïsme」、「Bienséance」、「Science-Poésie」の観点から、女性の優秀性が示されている。Malo は、女性の優秀性の起源を創世記に遡って、神は、男性を泥土でこねて作り、これに生命を与えたが、女性はこの男性から（つまり、男性の素材よりも上等な材料から）造られたのだから、造物主には、女性を「plus parfaite que l'homme」にする意図があったとしている。（*Le Mérite des femmes*, Janet, 1815, pp. 24-25 参照。）

(51) *Ibid.*, p. 24 参照。

(52) *Ibid.*, pp. 26-44 参照。

(53) *Ibid.*, pp. 129-130 参照。

(54) *Ibid.*, pp. 131-133 参照。

(55) *Ibid.*, pp. 136-140 参照。

(56) *Ibid.*, p. 142 参照。

(57) このリストでは、Poulain de La Barre の書が欠落しているが、Legouvé の *Le Mérite des femmes* (1801) や、Ségur の *Les Femmes...* (1803) と共に、英国の有名なフェミニスト Mary WOLLSTONECRAFT の *A Vindication of the Rights of Woman* (1792) の仏語訳や、Olympe de Gouges の *Les Droits de la femme* (1791)、Genlis の *De l'influence des femmes sur la littérature française* (1811) や、Malo の *Le Mérite des femmes* (1815) も掲載されている。

(58) GARDETON, *Le Triomphe des femmes*, Delaunay, Bossange, 1822, pp. 7-12 参照。Gardeton は、Eve が泥土という「あの下賤な材料」から造られた Adam と異なり、神の手を経た生命体から最後に造られたなどと、聖書の創世記の記述に遡り、神に由来する属性である美をふんだんに与えられた女性が「plus parfaite que l'homme」であることを否定するのは冒涇であるとする。（*Ibid.*, pp. 17-36 参照。本稿の註

(50) で言及したように、Malo も創世記に遡って女性の優越性を主張した。) 加えて、経験的、歴史的な事実や証言、身体上の性差さえも Gardeton は女性の優越性の論拠としている。

(59) *Ibid.*, p. 60.

(60) *Ibid.*, pp. 62-63 参照。

(61) *Ibid.*, pp. 63-64 参照。

(62) *Ibid.*, p. 64 参照。

(63) *Ibid.*, p. 75.

(64) *Ibid.*, pp. 80-81.

(65) *Ibid.*, p. 81.

(66) Wollstonecraft の書は、*Défense des droits des femmes* (in-8°, 2 parties en 1 vol., 533 p., Buisson, Paris; Bruyset, Lyon) というタイトルで、仏語訳版が1792年に出た。この「第8版」なるものは目下の所確認できていないが、Gardeton の«Traduit librement de l'anglais»である *Les Droits des femmes* (in-18, 180 p., L. F. Hivert, 1826) は、Wollstonecraft の書の翻訳書にはなっておらず、男性の不当な女性支配と女性の優秀性を論じる *Le Triomphe des femmes* (1822) と同様の主張のために活用しているに過ぎない。尚、Gardeton による *Les Droits des femmes* は、同年(1826年)第2版が出た。初版、第2版とも、出版申告部数は1,500部である。

(67) GARDETON, *Les Droits des femmes*, pp. 58-59 参照。

(68) *Ibid.*, pp. 61-62 参照。

(69) *Ibid.*, pp. 62-65 参照。

(70) *Ibid.*, pp. 68-69 参照。

(71) *Ibid.*, p.117.

(72) Wollstonecraft も、教育によって女性が多様な職業に携わることの可能性に言及するが、Poulain de La Barre や Gardeton が列举した男性の知的エリートが独占している多様な職種に、これほど徹底して触れていない。(WOLLSTONECRAFT, *Défense des droits des femmes*, Buisson, 1792, pp. 389-393 参照。)

(73) GARDETON, *Le Triomphe des femmes*, Chassaignon, 1834, pp. 9-10, p. 12 参照。

(74) *Ibid.*, p. 13 参照。

(75) *Ibid.*, p. 16 参照。

(76) *Ibid.*, pp. 26-27 参照。